# 共同住宅建設に伴う
# 楽音寺遺跡第３次発掘調査報告書

2002年

財団法人　東大阪市文化財協会

## 例言

1．本書は財団法人東大阪市文化財協会が1998年5月20日～7月10日に、楽音寺遺跡で実施した発掘調査の報告書である。

2．現地調査および本書の執筆は井上伸一が担当した。

3．現地における測量の基準には原則的に、国土座標第VI系を用い、北は座標北を指す。水準高はT.P.（おおむね東京湾中等潮位）を用いた。

4．現地で調査した土壌の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修）に準じた。

5．本書に掲載した現地の遺構、堆積層断面の写真は担当者が撮影した。また遺物写真は担当者および補助員が撮影した。

6．出土遺物については桜井市教育委員会の松宮昌樹氏にご教示を賜った。

7．調査の実施に当たり、北岸初子氏、生和建設株式会社にご協力賜った。

8．現地調査および整理作業には下記の補助員の参加があった。
有坂光司、内田豊子、規矩伸彦、小堀和彦、西村和浩、本田けい子、森澤匡晴

## 目次

第1章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2章　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第3章　層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第4章　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第5章　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第6章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

# 第１章　はじめに

楽音寺遺跡は東大阪市南東部の横小路町から八尾市に拡がる、弥生時代～江戸時代にいたる複合遺跡である。当遺跡は生駒山地西側の標高15～20mの扇状地に立地している。

本市内では1995年に第１次調査が横小路町５丁目1049・1060・1061において実施され、弥生時代中期～古墳時代前期の遺構と遺物が確認された（五井2002）。同年、横小路町５丁目1049・1060・1061番地で第２次調査が実施され、弥生時代中期～江戸時代の遺構と遺物が確認された（松田2002）。

その後、第１次調査地の東側に隣接する横小路町５丁目1073-1・3～6において共同住宅建設の計画が持ち上がり、東大阪市文化財協会が1998年１月21日に試掘調査を実施したところ、地表下85～220cmで弥生時代～古墳時代の遺物が確認された。そのため、共同住宅の建設に先立ち発掘調査が必要との判断が教育委員会より、依頼者の北岸初子氏ならびに代理者の生和建設に示され、協議が重ねられることとなった。その結果、東大阪市文化財協会が共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第３次発掘調査を受託し、現地調査を1998年５月20日～７月10日、整理作業を2002年８月31日まで行った。

図１　機械掘削　南から

# 第２章　調査の方法

調査区は共同住宅建設予定地内の一部で、中央から北側に表面積306.3m²が設定された。掘削深度は試掘調査の結果から地表下2.2mまでが対象となった。ただし、発掘調査に伴う鋼矢板の打設等の土留め工事が行われなかったため、壁面には傾斜を持たせ掘削し、底面積は78.8m²であった。

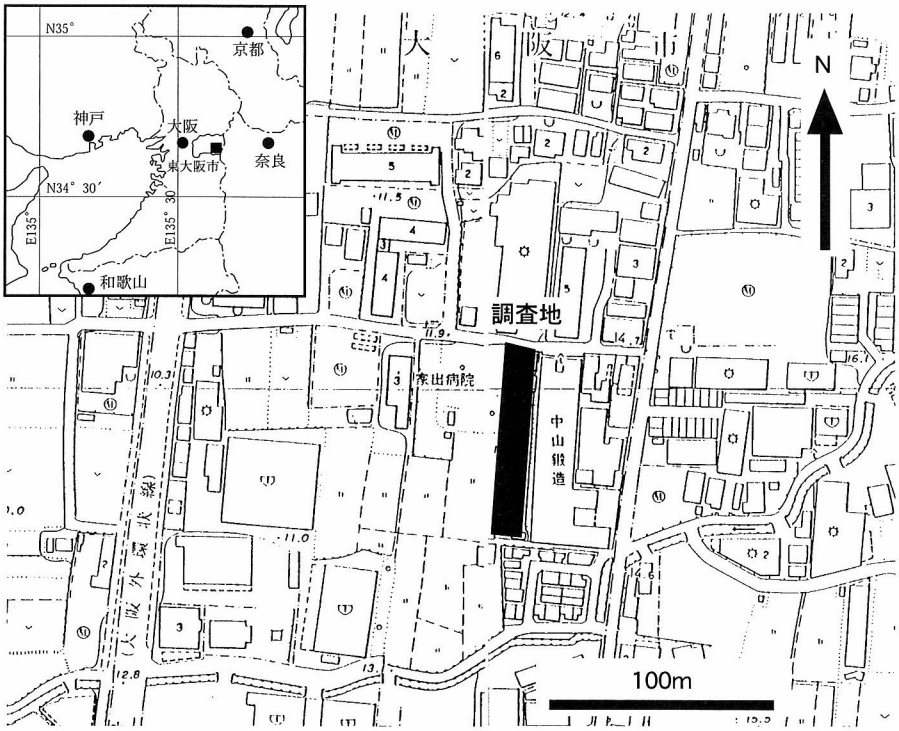


図２　調査地位置図

また地表下約40cmまでを重機によって掘削し、遺構の検出を行った。その後、約10cm人力掘削し、遺構の検出を行った。ここまでの遺構検出は、調査期間との関係から、調査区北半の部分的なものにとどまり、写真撮影のみ行った。その後、地表下100cmまでは人力と重機を併用して掘削し、それ以下は人力掘削で遺構を検出し、写真撮影と図化を行った。

## 第3章　層位

第1層は盛土、第2・3耕作土層である。第2層の下面では図7・8に示したように近世以降の溝・暗渠が検出された。また第3層には鉄分の沈着が認められた。第3・4層は図17～23に示した古墳時代後期～奈良時代頃の遺物を含み、第4層の下面で図9・10に示した古墳時代後期の溝・土壙が検出された。

第5層は調査地北部で層厚約60cm、中央部あたりの流心で後述する流路の上位では浸食も著しく層厚約100cmとなる。上層との境界付近にはマンガン、下層との境界付近には鉄分の沈着が認められた。本層からは図26～34に示した古墳時代前期の遺物が出土した。

第6層も第5層と同様に北部は層厚10cm程と薄いが、中央部やや南よりで層厚40cmと厚くなる。古墳時代前期の遺物が出土した。

第7層は部分的に鉄分が沈着し、古墳時代前期の遺物を含み、下面で図12・14に示した遺構が検出された。

第9層は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含み、下面で図16に示した遺構が検出された。

第10～29層は後述する流路内の堆積層である。第26・29層は遺構内の底部に自然に堆積した層で、その上位には遺構内の中央やや北寄りを残して、人為的に

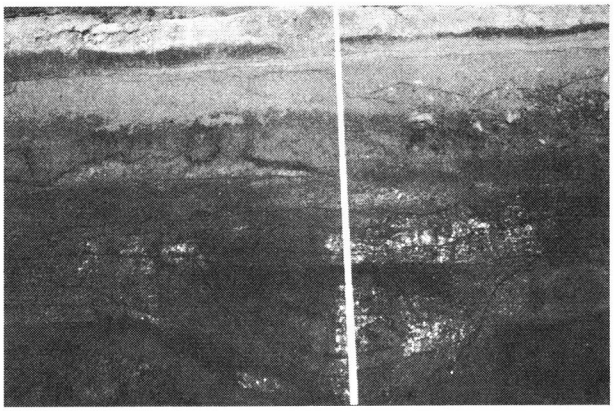

図3　東壁断面

1．盛土
2．耕土
3．10YR5/4にぶい黄褐色シルト混じり砂礫
4．10YR4/3にぶい黄褐色シルト混じり砂礫
5．10YR5/3にぶい黄褐色2cm以下の砂礫
6．2.5GY4/1暗緑灰色シルト～細粒砂　5mm以下の礫含む
7．2.5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土
8．7.5Y4/1灰色粘土混じり中粒砂～極粗粒砂　5mm以下の礫含む
9．7.5Y2/1黒色粘土
10. 7.5Y4/1灰色砂礫
11. 2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～細粒砂　シルトのラミナ・植物遺体含む
12. 2.5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じりシルト　1cm以下の礫・炭化物・植物遺体含む
13. 5Y2/1黒色シルト～細粒砂　炭化物・植物遺体含む
14. 5Y4/1灰色細粒砂～粗粒砂　植物遺体含む
15. 2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中粒砂　植物遺体含む
16. 5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じりシルト　5mm以下の礫含む
17. 5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土　5mm以下の礫含む
18. 5Y3/1オリーブ黒色シルト混じり中粒砂～1cm以下の礫
19. 10Y4/1灰色極細粒砂～中粒砂
20. 2.5Y2/1黒色極細粒砂～中礫
21. 10Y2/1黒色粗粒砂～中礫混じり粘土
22. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト～極細粒砂
23. 7.5Y2/1黒色中粒砂～5mm以下の礫　シルトブロック混じる
24. 7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂～5mm以下の礫　粘土ブロック混じる
25. 5Y2/1黒色粘土混じり中粒砂～極粗粒砂
26. 5Y4/1灰色中粒砂～5mm以下の礫
27. 5Y4/1灰色シルト混じり細粒砂～極粗粒砂
28. 7.5Y4/1灰色中粒砂～極粗粒砂混じりシルト
29. 5Y3/1オリーブ黒色中粒砂～極粗粒砂
30. N2/黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土　細礫含む
31. 7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂
32. 7.5Y2/1黒色シルト～粘土
33. 7.5Y2/1黒色シルト混じり細粒砂～粗粒砂　細礫含む
34. 2.5Y2/1黒色シルト混じり細粒砂　細礫含む
35. 7.5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じりシルト　細礫含む
36. 5Y2/1黒色粘土　細粒砂～粗粒砂少量含む
A. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫
B. 2.5Y5/3黄褐色シルト混じり中粒砂～極粗粒砂　5mm以下の礫含む
C. 2.5Y5/3黄褐色中粒砂～極粗粒砂混じりシルト　5mm以下の礫含む
D. 10Y3/1オリーブ黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土
E. 5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土　5mm以下の礫含む
F. N1.5/黒色粘土　細礫微量含む
G. 2.5Y2/1黒色細粒砂～中粒砂
H. 5Y2/1黒色中粒砂～極粗粒砂混じり粘土
I. 10Y2/1黒色シルト混じり中粒砂～極粗粒砂　細礫含む
J. 5Y2/1黒色シルト混じり細粒砂～極粗粒砂
K. 5Y3/1オリーブ黒色シルト　炭化物の薄層2枚含む

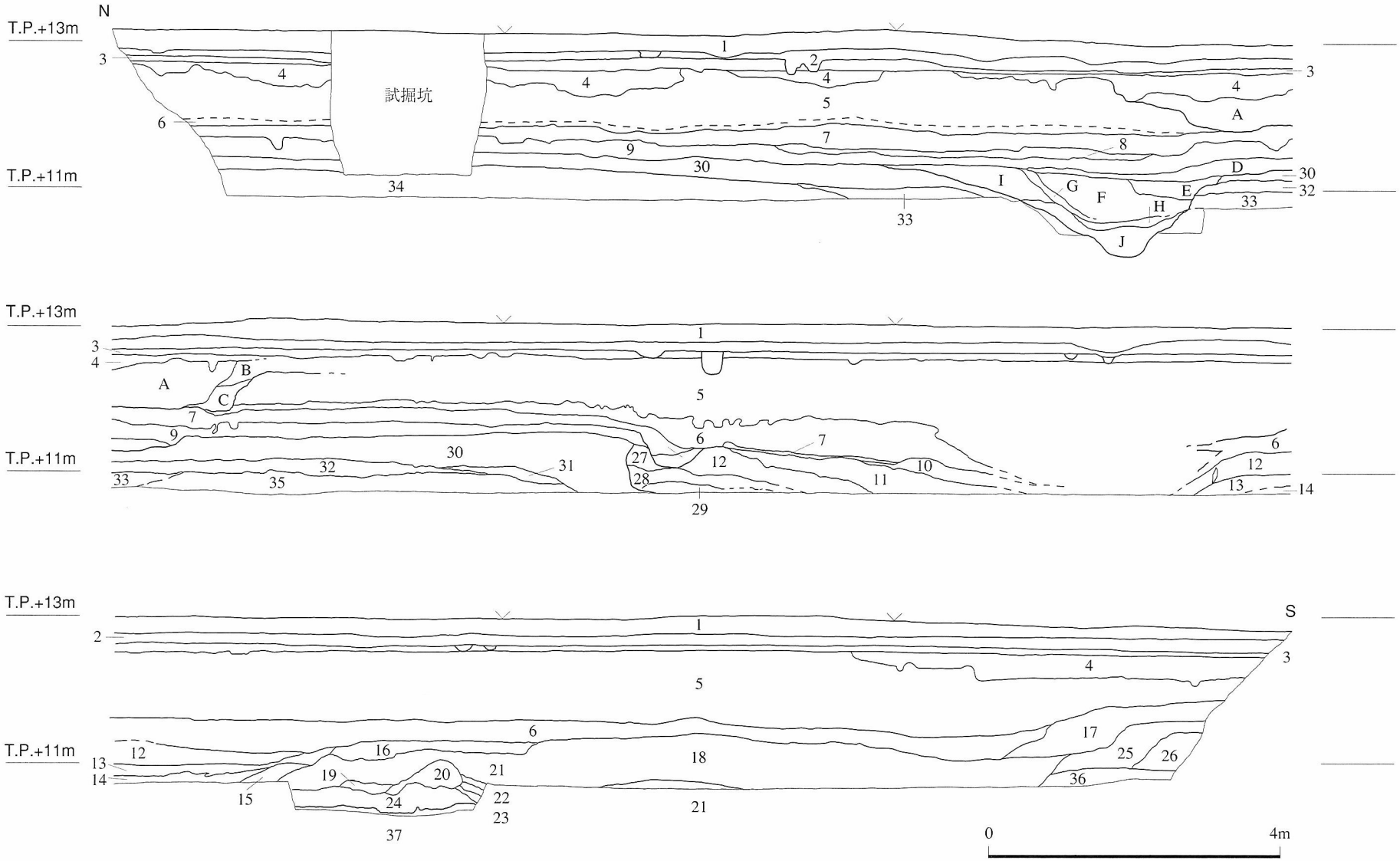


図４　東壁断面図

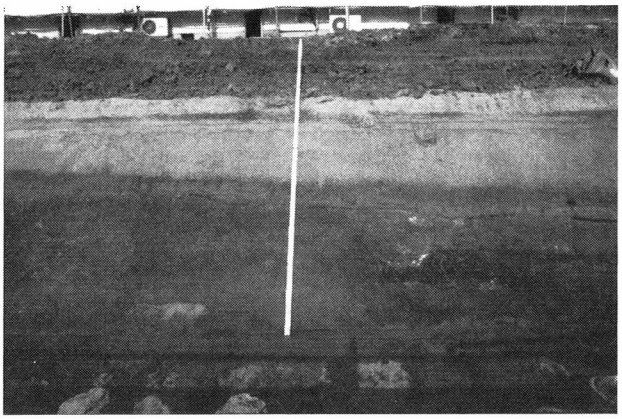

図５　東壁断面

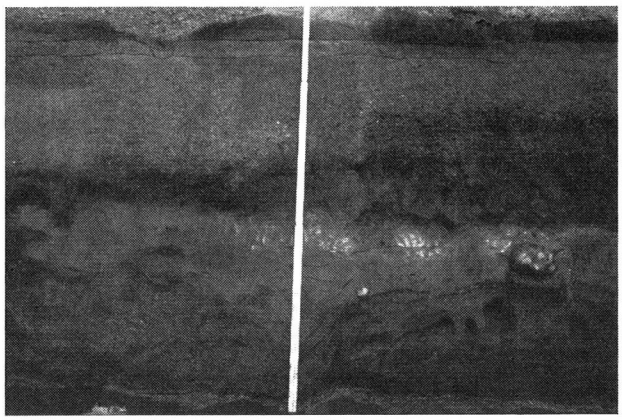

図６　東壁断面

堆積させられた層が認められた。さらにその上位には自然に堆積した第13～15層、人為的に堆積させられた第12層、自然に堆積した第10・11層が続いていた。

また第30層以下からは遺物が出土しなかった。隣接する第１次発掘調査の結果から弥生時代中期以前の堆積層と思われる。

## 第４章　遺構

第２層の下面では近世の耕作に伴う溝５条と暗渠２条を検出した。溝は北端で検出した１条だけが南北方向に延び、それ以外は東西方向に延びる。幅は22～40cm。暗渠はいずれも東西方向に延び、図７・８のように幅25cm程の堀方内に直径10cm程の竹が埋められていた。遺存していた最も長い竹は５ｍ以上の長さであった。平行して東西方向に延びる溝・暗渠の間隔は3.3～7.2mで、南方ほど間隔が拡がっていたが、特に規則性は認められない。

図７　暗渠断面　西から

第４層の下面で溝と土壙を検出した。図９・10に示した溝８は調査地が西に突出する部分の北隅付近で検出された。幅40cmで北北東から南南西方向に延びていた。溝内からは図24・25に示した須恵器など６世紀末頃の遺物が出土した。

土壙は南北幅4.2m程で東半は調査地外に拡がっていた。遺構内の堆積層は図４のA～C層に相当し、概ね第５層が撹拌されたもので、長径5cm以下の礫やシルトが少量混入していた。須恵器、土師器の細片が出土し、溝８と同時期に属するものと思われる。

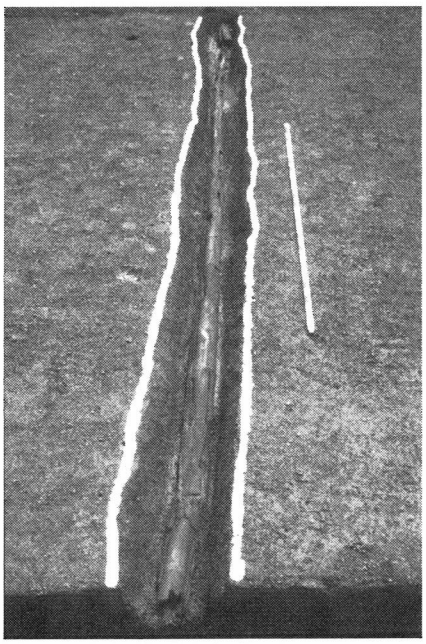

図８　暗渠　西から

第７層の下面では図12に示した古墳時代前期の遺構が検出された。溝は幅40cm、深さ20cm以下の小規模なものが４条確認された。そのうちの溝12と13の２条はT字状に交差していた。溝内の埋土は概ね第９層であった。各溝からは土師器甕の細片が出土した。

土壙２は一辺２ｍ以上の不定形をなし、調査地外へ拡がっていた。深さ10cmほどであった。埋土は細粒砂～極細粒砂混じり粘土で細礫～中礫を多く含んでいた。土師器甕の細片が出土した。

ピットは７個確認された。長径40cm・短径27cm以下の楕円形の

図９　溝８検出作業　西から

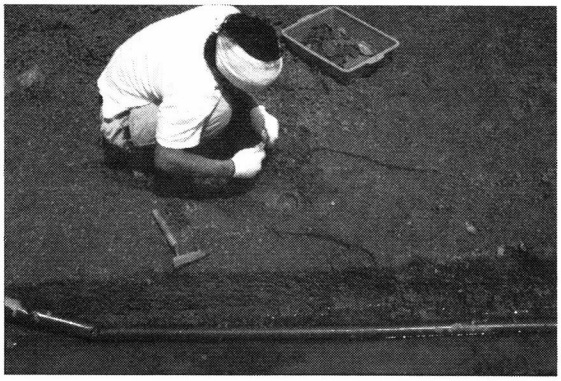

図10　溝８掘削作業　西から

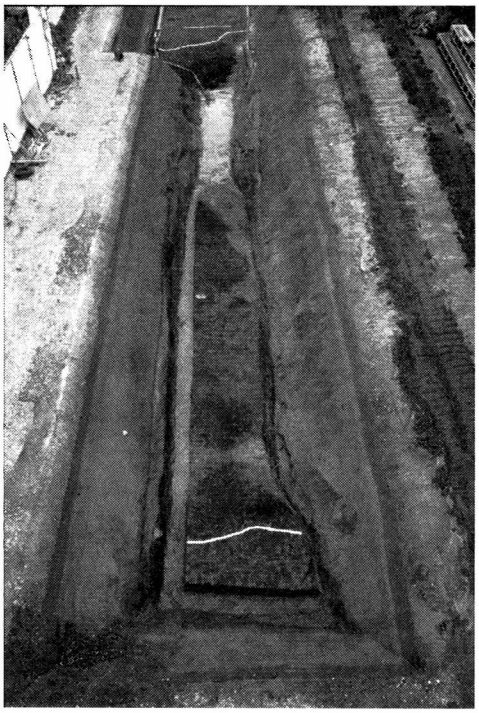

図11　流路
南から

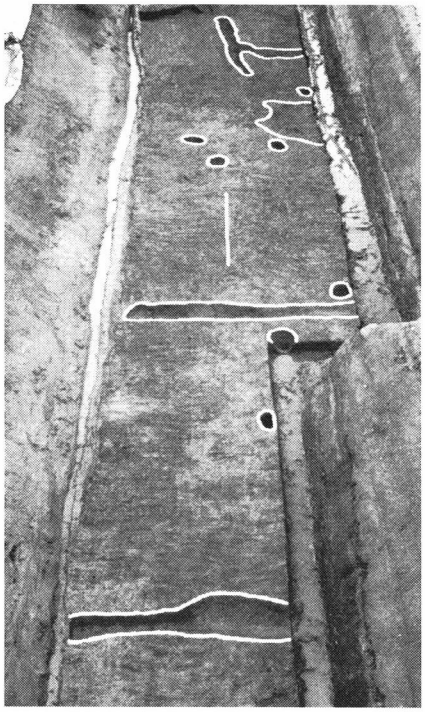

図12　古墳時代前期の遺構１
北から

ものが６個、直径32cmの円形のものが１個で、深さは22cm以下であった。そのうちピット２からは図14に示したように直径10cmほどの柱根が検出された。ピット１・３・６からは土師器の細片が出土した。

第９層の下面では図16に示した古墳時代前期の遺構が検出された。土壙は２基確認され、土壙３は長径130cm・短径38cmの楕円形をなし、深さは20cm、埋土は中粒砂～極粗粒砂であった。土壙４は一辺260cm程度の隅丸方形をなすと思われるが、東半は調査地外へ拡がっていた。深さは120cmであった。土壙内の埋土は図４のＤ～Ｊ層である。これらの土壙からは土師器甕などが出土した。

ピットは調査地の北端で５個確認された。直径4.2mほどの円弧をなすように長径40cm・短径27cm以下のピット８・10・12の３個が、約1.4mの間隔で検出され、円形の竪穴住居の一部であった可能性がある。ピット10と12の円弧外側に当たる西方では、直径14cm程度のやや小さいピット９・11の２個が併存していた。その

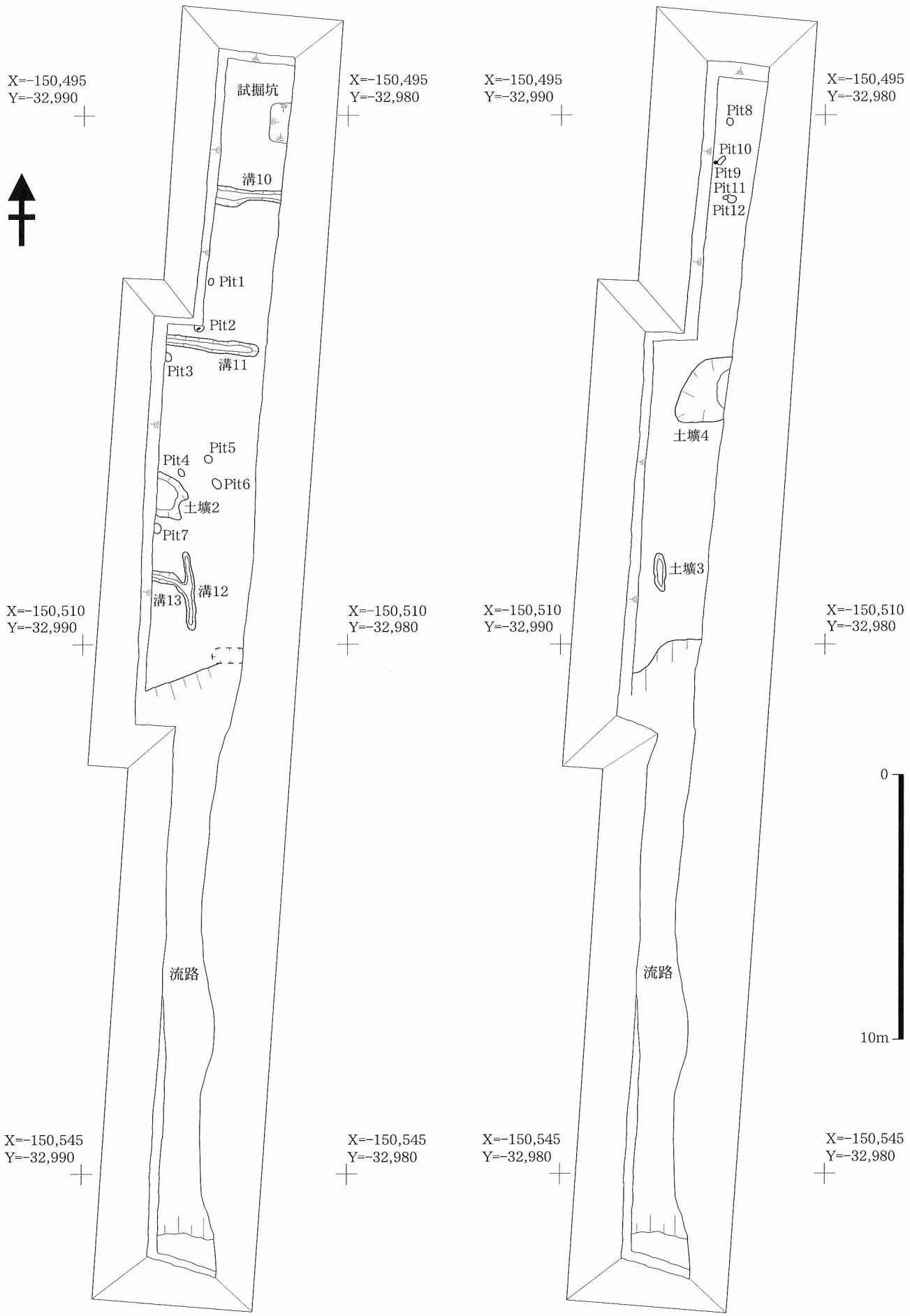
X=-150,495
Y=-32,990
X=-150,495
Y=-32,980
試掘坑
溝10
Pit1
Pit2
Pit3
溝11
Pit4
Pit5
Pit6
土壙2
Pit7
溝13
溝12
X=-150,510
Y=-32,990
X=-150,510
Y=-32,980
流路
X=-150,545
Y=-32,990
X=-150,545
Y=-32,980
X=-150,495
Y=-32,990
X=-150,495
Y=-32,980
Pit8
Pit10
Pit9
Pit11
Pit12
土壙4
土壙3
X=-150,510
Y=-32,990
X=-150,510
Y=-32,980
流路
X=-150,545
Y=-32,980
X=-150,545
Y=-32,980
0
10m

図13　遺構平面図

図14　Pit2柱根　北から

図15　流路内遺物出土状況

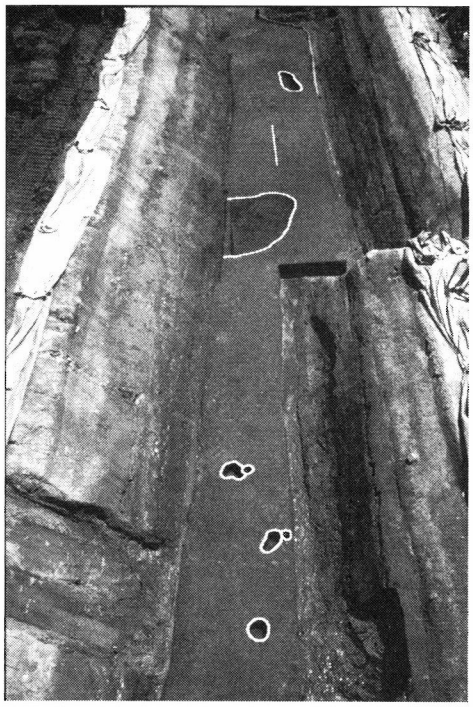

図16　古墳時代前期の遺構2
北から

うちピット9には柱根の遺存が認められた。ピット8からは土師器細片が出土した。

調査地の南半では図11のように幅24m以上の流路が検出された。予定の掘削深度では底部を確認できなかったが、部分的なトレンチ調査の結果深さは1mほどであった。北肩の角度と、本調査地の西側で行われた第1次発掘調査地でこの遺構が検出されていないことなどから、この流路は東北東から西南西方向に延びるか、あるいは本調査地で南方へ方向を変えているものと思われる。この流路内には第3章でも触れたように、自然に堆積した層と人為的に堆積させられた層が認められた。流路底部は部分的な掘削によって確認したため判然としないが、少なくとも2度は流路内に土砂が人為的に入れられている。うち一度は幅11.6mほどになるよう流路内の南部に土砂を投入して埋められていた。小規模となっても流路内には水がたまっていたようで図4の第13～15層が堆積し、第12層が遺構内に投棄され、第10・11層が自然堆積した後は遺構のベース層と共に第6・7層によって覆われていた。流路内からは図15および35～51に示した遺物が出土した。

## 第5章　遺物

第3～4層からは図17～23に示した古墳時代後期～奈良・平安時代頃の遺物が出土した。5のカマドは暗褐色の色調をなし、上部には青海波、庇付近にはハケメが認められる。

溝8からは図24・25に示した須恵器の他に土師器の細片も出土した。6～8の須恵器杯・蓋は口縁端部が丸い、立ち上がりが低いなどの特徴から6世紀末頃のものと思われる。

第5層からは図26～34に示した古墳時代前期の土師器甕・小型丸底壺・高杯などが出土した。9・10の甕底部外面には成形段階に使用した籠の網目が遺存して

図17　第3層出土土師器杯

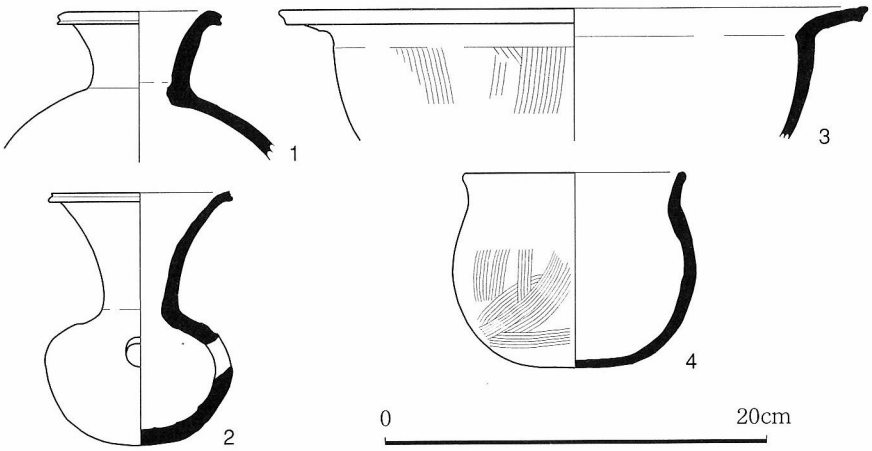


図18　第3～4層出土土器実測図

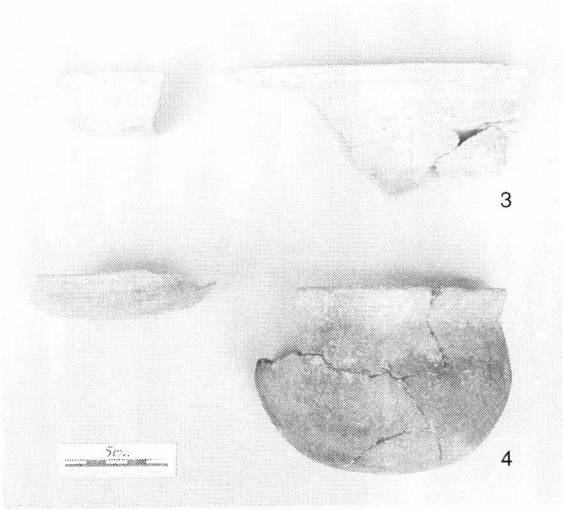


図19　第3～4層出土
須恵器、土師器

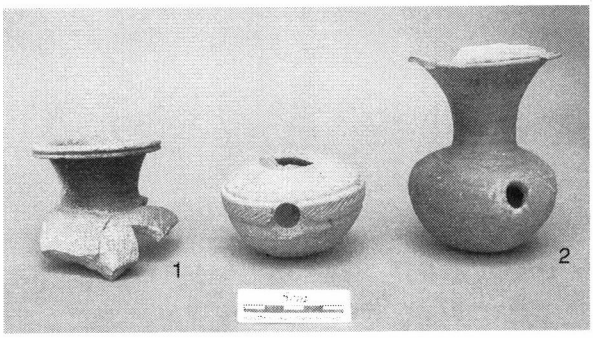


図20　第3～4層出土須恵器

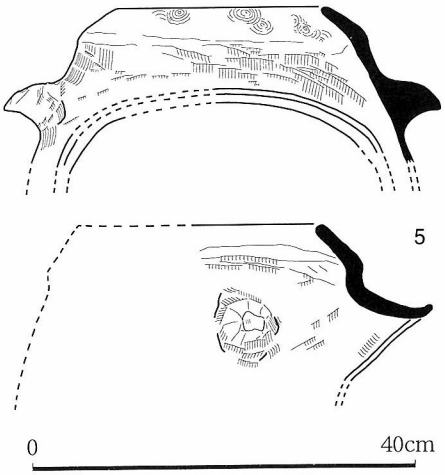


図21　第3～4層出土カマド実測図

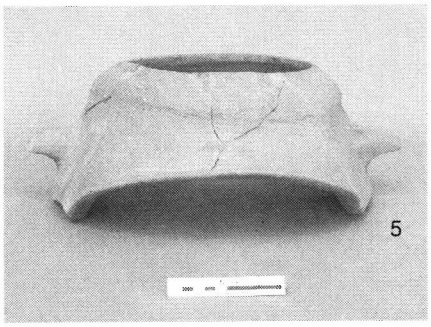


図22　第3～4層出土カマド正面

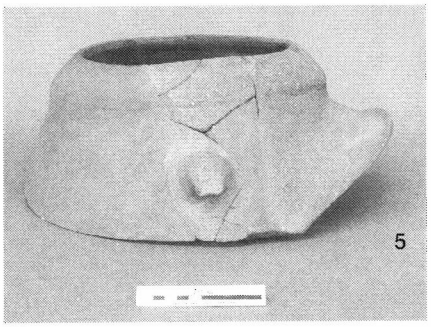


図23　第3～4層出土カマド側面

図46　流路出土高杯

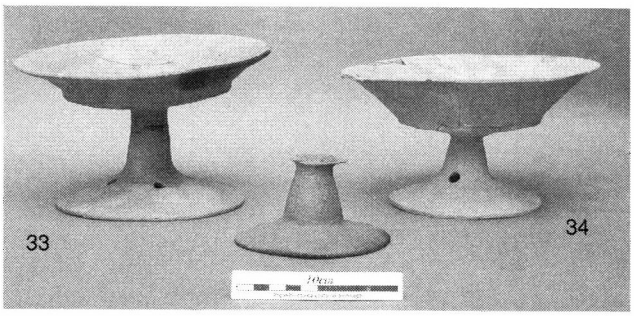


図47　流路出土高杯

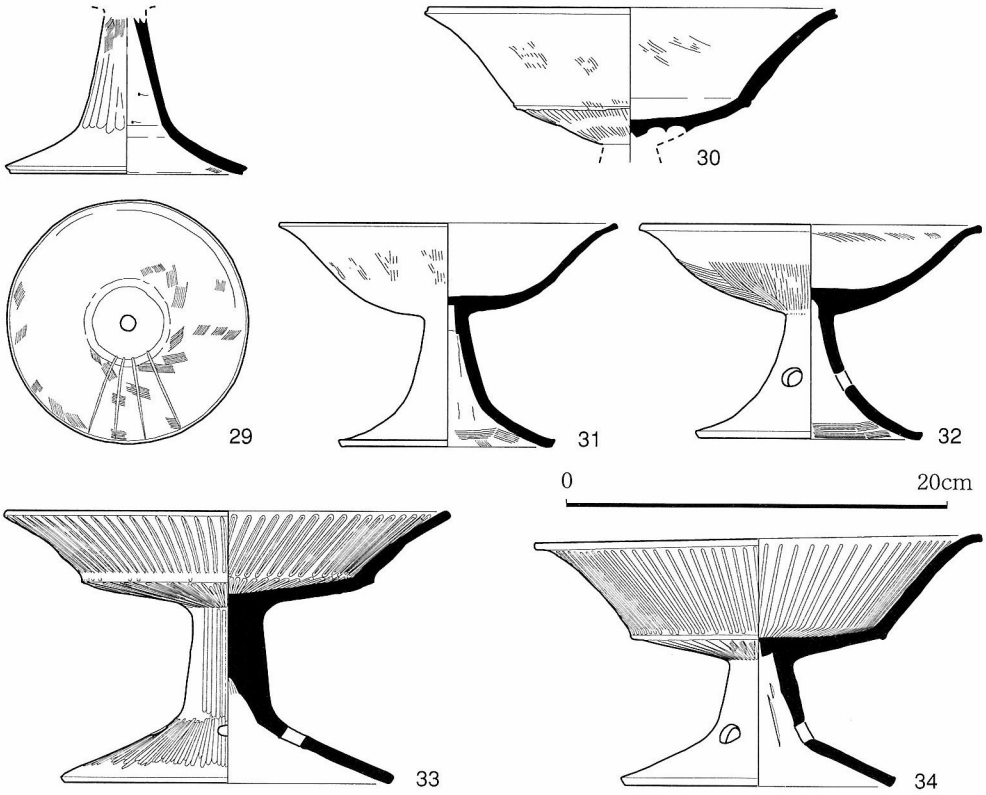


図48　流路出土土器実測図

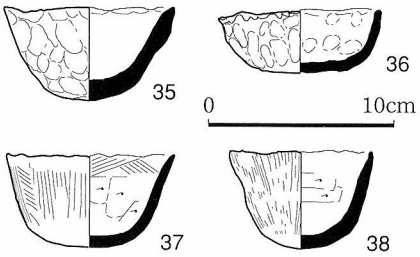


図49　流路出土土器実測図

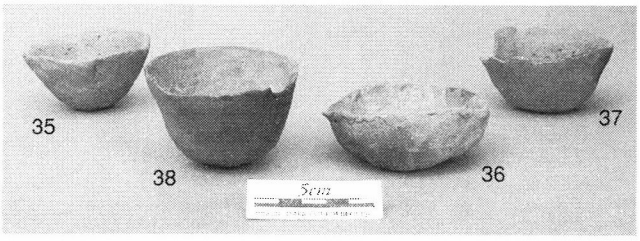


図50　流路出土手づくね土器

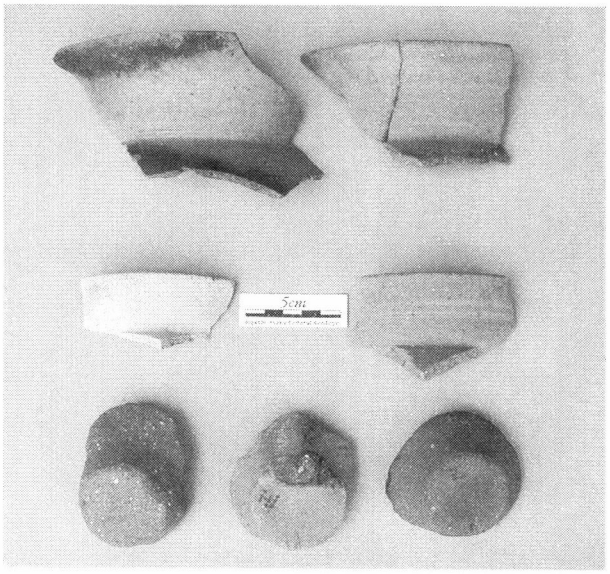


図51　流路出土土師器甕、弥生土器甕

おり、その上からハケメ調整が施されている。11の甕は灰白色の色調をしており、搬入品である。本層出土の甕には煤の付着がほとんど認められない。13の小型丸底壺は底部のおよそ半分を穿孔されている。

流路からは図35～51に示した土師器小型丸底壺・広口壷・杯・甕・高杯・手づくね土器と弥生時代後期の土器が出土した。20の小型丸底壺の底部外面には十字状のヘラ描きが認められる。そのうちのひとつの線は二重になぞられている。24の土器はここでは杯と仮称しておく。須恵器の杯に比べると口径に対する高さの比率が高く、後世の羽釜のような器型をなす。底部には剥離痕が認められ、脚が付いてい可能性がある。甕の外面には煤の付着があるものが多く、第5層出土の甕とは対照的である。29の高杯の脚部内面には、垂直方向にヘラ描きされた4条の直線が認められる。33と34の高杯は流路の底部から出土した。いずれも杯部にはミガキが施され、円形の透かしが33には3個、34には4個認められる。手づくね土器は35と36に指頭圧痕、37と38にはハケメが残り製作技法の違いが窺い知れる。また流路の底部からは、図51に示したような弥生時代後期の甕底部が数点出土した。

## 第6章　まとめ

東大阪市内における楽音寺遺跡の発掘調査では、これまでに弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世、近世の遺構と遺物が確認されていた。今回の調査では弥生時代中期の人間活動の痕跡は検出されず、弥生時代後期の遺物も古墳時代前期の遺構に少量混入していたに過ぎなかった。古墳時代前期の遺構では住居関連のピット、溝などと流路を確認できた。また古墳時代後期では溝、土壙などの遺構と遺物を検出できた。古代の遺物については少量出土したが、当該期の遺構は地表下の比較的浅いところにあったため、後世の棚田造成によって削平され、それ以後、本調査地が近年まで耕作地として利用されてきたことが明らかとなった。

参考文献

五井若葉　2002「楽音寺遺跡第1次発掘調査報告」『楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会

松田順一郎　2002「楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序―共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第2次発掘調査報告―」『楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会

報告書抄録

| | |
|---|---|
| | きょうどうじゅうたくけんせつにともなうがくおんじいせきだいさんじはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第3次発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 編著者名 | 井上伸一 |
| 発行機関 | 財団法人 東大阪市文化財協会 |
| 所在地 | 〒577-0843　東大阪市荒川3丁目28-21　　電話番号　06-6736-0346 |
| 法人ID | 42170　　発行年月日　2002年8月31日 |
| | がくおんじいせき |
| 所収遺跡名 | 楽音寺遺跡 |
| | ひがしおおさかしよこしょうじ |
| 所在地 | 東大阪市横小路5丁目1073-1、3、4、5、6 |
| 市町村コード | 27227　　遺跡番号　110 |
| 調査位置 | 北緯　34°38'44"1　　東経　135°38'13"1（JGD2000） |
| 調査期間 | 1998年5月20日～7月10日　　調査面積　306.3m² |
| 調査原因 | 共同住宅建設 |
| 種別 | 集落跡/耕作地跡 |
| おもな時代 | 古墳時代前期/古墳時代後期/江戸時代 |
| 調査概要 | 古墳時代前期-溝+ピット+土壙+流路/古墳時代後期-溝+土壙/江戸時代-溝+暗渠 |
| 特記事項 | |


共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡
第3次発掘調査報告書
2002年8月
発行　財団法人東大阪市文化財協会
東大阪市荒川3-28-21
06-6736-0346
印刷　喜光堂印刷株式会社

共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第3次発掘調査報告書

二〇〇二

財団法人　東大阪市文化財協会